

# ヘルベルト・マルクーゼにおける技術論の構想

——戦時期テクノクラシー分析から——

馬渡 玲欧

ヘルベルト・マルクーゼは、社会的生産過程の技術的総体である技術（technology）と資本主義、政治体制の結びつきを喝破し、「技術的合理性」批判を繰り出したことで知られている。本稿は、マルクーゼが「技術的合理性」批判を本格的に開始した1941年のSome Social Implications of Modern Technologyについて、ソースタイン・ヴェブレンへの読解に着目しながら、戦時期から1960年代まで続くマルクーゼの技術論の構想を示す。結論として、戦時期であれば「技術と労働」、1960年代であれば「技術と芸術」のように、別の行為と技術（technics）が結びつくことで、技術（technology）の支配を乗り越え、技術（technics）による「解放」を目指していたことが明らかになる。

## 1 はじめに

フランクフルト学派第一世代として知られる社会哲学者 Herbert Marcuse (1898-1979、以下マルクーゼと呼ぶ。) は、1960年代末にかけてアメリカ、ドイツ、フランス、日本で広がった学生運動・反体制運動における理論的支柱のひとりであった。本稿は、同学派第一世代の中でもその思想が顧みられることが少ないとされる<sup>1</sup>マルクーゼの、とりわけ技術思想に関する学説史研究である。

近代化の過程で専門分化した諸科学の拠点であった大学などの高等教育機関では、「合理性」(rationality) をめぐる様々な問題に学生や教授陣が対峙していた。当時のベトナム戦争における軍産学複合体やテクノクラシー、管理社会など、日常生活世界に専門知がどのように影響を与えるのか、学問の批判的・反省的な役割が問われていた時代であった。

マルクーゼの弟子にあたる Andrew Feenberg

(以下、フィーンバーグと呼ぶ。) は、マルクーゼが学生運動期に果たしたテクノクラシー批判が、科学技術の社会構成主義の先鞭をつける試みであったと評価する。マルクーゼは、「技術」における政治支配の契機を指摘すると同時に<sup>2</sup>、「技術的な支配を社会組織と関係づけ、技術にたった一つの本質があるのではなく、技術は社会に条件づけられ、社会システムが異なれば別の役割をはたすよう再構成される」とも考えていたとフィーンバーグは述べる (Feenberg 1999=2004: 10)。

以上のように、1960年代から現代へと連なるテクノクラシー批判の端緒のひとつにマルクーゼが位置づけられる文脈がある<sup>3</sup>一方で、マルクーゼの思想内在的に技術批判の思想を検討してみると、技術の政治支配に対する人為的介入の問題における根本的な両義性に行き当たる。それは、技術による「支配」(domination) と「解放」(liberation) の本源的な両義性である。この強く技術依存的な立論構成が、後に見るよ

うに、マルクーゼの思想が「技術決定論」と見なされる一因となっている。

本稿は、このようなマルクーゼの議論の基層を、マルクーゼが先の第二次世界大戦期のアメリカ亡命中に記したテキストに求めたい。1941年に書かれた *Some Social Implications of Modern Technology* (以下、「テクノロジー論文」と呼ぶ。) <sup>4</sup> は、1964年の管理社会批判の書として知られる *One-Dimensional Man* (以下、『一次元的人間』と呼ぶ。) の原型である。本稿は同論文のとりわけソースタイン・ヴェブレンへの言及に着目し、戦時期の議論を経由することで、戦時期から現代まで連なるテクノクラシー批判の系譜を指摘すると同時に、技術による「解放」をいかに論じていたか、1960年代の議論との異同を考察する。

本稿の構成は以下の通りである。2節でマルクーゼの技術論の骨子を確認した後、3節で当該の議論に対する既存の評価を技術決定論の立場としてまとめた上で、本稿の視角を明確にする。続いて4節、5節では、上記の「テクノロジー論文」を中心にテクノクラシー思想の開祖と言えるヴェブレンとの思想の共鳴関係を論じていく。

## 2 マルクーゼ技術論の骨子

本節では、『一次元的人間』を中心に、1960年代におけるマルクーゼの「技術的合理性」批判の骨子を確認する。『一次元的人間』の狙いについて、マルクーゼは以下のように述べる。

この分析の焦点は先進産業社会である。ここでは、(増大するオートメーション部門を含む) 生産と分配の技術的機構 (technical apparatus) が、その社会的・政治的な影響

から切り離すことのできる単なる道具の総量として機能するのではなく、むしろその機構の生産物と機構を操作し拡張する活動とをア・プリオリに決定する一つの体制として機能している。この社会では、生産機構は社会的に必要な職業、技能、態度だけでなく、個人的な欲求や願望をも決定するほどにまで全体主義化する傾向がある。生産機構はこうにして私的生活と公的生活、個人的欲求と社会的要求の間の対立を消し去ってしまう。技術 (Technology) は、これまでより有効で快適な新しい社会統制と社会的結合の形態を創りだすのに役立つ。(Marcuse 1964=1974: 13)

マルクーゼは、産業のための技術の総体が、単にその産業におけるそれぞれの用途のために用いられているわけではないことを述べる。この技術の総体は、個人の必要や欲求を満たすために技術を動員して何かをつくりだすという状況を転換させ、「機構」が生産するからそれを人間が欲するという状況を生じさせる。

この状況は、個人の「内的自由」、すなわち「世論や社会的態度から独立した個人的意識や個人的無意識」(Marcuse 1964=1974: 28) が、「社会」と同一化することを示す。マルクーゼはこの同調を「模倣 (mimesis)」と呼ぶ (Marcuse 1964=1974: 29)。

この「模倣」の過程は、「私的生活と公的生活」「個人的欲求と社会的要求」の対立を消し去る過程である。元来、「19世紀ヨーロッパ社会の現実の矛盾を明示していた」カテゴリーはまず「社会」であり、それは「国家に敵対するものとしての社会」という意味を含んでいた (Marcuse 1964=1974: 12)。そもそも批判理論は、この「社会」が持つ対国家的な含意に即

して発展してきたものだとも言える (Marcuse 1964=1974: 12)。

しかしこの含意は、国家や政治的領域に対する批判的な含意を失う。政治的領域と社会的領域の対立が消失するだけでなく、社会と個人の対立も消失する。マルクーゼは、「解放を求める歴史的な力が既存社会の内部に発達するという考えこそ、マルクス理論の隅の首石である」(Marcuse 1964=1974: 42-3) と述べるが、上記の消失の過程により、革命的な主体の意識も潰れてしまった。

この消失の過程に寄与するのが技術 (technology) である。技術 (technology) は中立的ではなく、「技術的 (technological) な社会は一個の支配の体制であって、この体制はすでに技術の概念と構造 (the concept and construction of techniques) のなかに働いている」(Marcuse 1964=1974: 14) というのがマルクーゼの議論の骨子である。「技術の媒介によって、文化、政治および経済は、あらゆる選択肢を吸収もしくは拒絶する一個の遍在的な体制へ溶け込んでしまう」のであり、「技術的合理性は政治的合理性と化することになる」のである (Marcuse 1964=1974: 14)。

技術的合理性、言い換えれば、技術の進歩・発展における合理化がなぜ政治的合理性、いわば統治における合理化につながるのだろうか。マルクーゼの言葉では、「今日、政治権力は生産機構の機械操作と技術的組織を支配することによって、その地位を確保している」(Marcuse 1964=1974: 21) という認識のもと、生産力の動員によって政権を安定させるということが「技術的合理性=政治的合理性」という事態を指すのである。

以上のようなマルクーゼにおける「技術的合理性」の思想的源泉を、Feenberg (1988) は、

マルクス、ウェーバー、ルカーチの三者に求めている<sup>5</sup>。まず、マルクスは賃金と労働力の形式的に平等な交換を通して、資本主義階級の権力が再生産されることを論証し、一見すると「中立的」な経済システムの持つ「形式的なバイアス」を研究する道筋を立てた (Feenberg 1988: 242)。

次に、ウェーバーは、前資本主義的な社会において、支配的な社会集団を支えるために働く「実質的合理性」、そして「実質的」な必要を達成するというより、資本主義における生産と配分の効率性を目的に、計算可能性を利用する「形式的合理性」の二つの合理性を提示した (Feenberg 1988: 242-3)。

最後に、ルカーチは、ウェーバーが「合理化」という言葉で表した事態を「物象化 (reification)」として表している (Feenberg 1988: 244)。フィーンバーグによれば、ルカーチの議論は、資本主義下の形式的合理性によってもたらされる不平等を説明するが、この議論はなぜその形式的合理性が歴史の特定の時点で可能になったのかということは説明しない。マルクーゼはこのルカーチが説明し残した点を、資本主義における科学・技術の政治的役割の拡大という観点から考察するとフィーンバーグはいう (Feenberg 1988: )。

フィーンバーグは以上の三者の議論のマルクーゼに対する影響を述べているが、本節ではマルクスやルカーチの議論よりも、1960年代にウェーバーの議論に直接言及している論文に限定して、実際に「形式的合理性」と「技術的合理性」の関係を見ていきたい。『一次元的人間』と同年に開かれた、マックス・ウェーバー生誕100周年シンポジウムでのマルクーゼの講演「産業化と資本主義」を元にした論文「マックス・ウェーバーの著作における産業化と資本

主義」(1965年)を参照しよう<sup>6</sup>。

マルクーゼの基本的な主張は、「資本主義的合理性の展開につれて、非合理性が理性になる」というものである(Marcuse 1965=1972: 164)。この主張はウェーバーの議論の中に明示的では無いものの、その概念構成のなかに含まれているというのがマルクーゼの見立てである(Marcuse 1965=1972: 165)。マルクーゼがウェーバーの議論について資本主義の合理的な生産性が有する破壊的な帰結が「概念構成のうちに秘められている」と述べる時、彼の方法になんらかの限界があることが示される。その限界は、「ウェーバーの資本主義分析は、資本主義固有の価値観が形式合理性の『純粋な』諸規定のうちに入り込んでいるかぎり、必ずしも没価値的なものではなかった」(Marcuse 1965=1972: 185)という点に要約できるだろう。『『理性』は市民的理性であり、それもその一部、つまり資本主義的—技術的理性にすぎなかった」(Marcuse 1965=1972: 166)とマルクーゼが述べる時、形式的合理性の歴史的制約が明らかになる。すなわち、形式的合理性も実質的合理性であるとマルクーゼは考えていた。資本主義における技術的合理性の政治的拡大において、なぜその形式的合理性が歴史の特定の時点で可能になったのか。

この形式合理性が、自分の領域の内にとどまって、計算と計算づくの行為の規範として、自己自身の体系だけにしがみついているかぎり、かえってそれは、「外部から」つまり自分自身とは別のものから、決定されることになる。——こうして理性とは、マックス・ウェーバー自身の定義にしたがって、「実質的」なのである。なぜなら規定されていないような連関などは存在しないし、規定され

た連関として、あらゆる連関は依存している。あらゆる経済行為が行なわれる歴史の連続のうちで、経済的理性はつねにすべて支配の理性となり、それが歴史的—社会的なものとしての経済行為を規定する。どんなに数量化された「科学的な」資本主義でも、依然として人間に対する数量化された技術的な支配(technologische Herrschaft)である。(Marcuse 1965=1972: 173)

経済活動に人間が関与し続ける限り、資本主義下の「形式的合理性」を純粋な概念構成として想定することは難しくなる。さらに、理性による数量化の機能を一種の「技術」と捉えることで、形式的合理性は技術的合理性(=政治的合理性)へと読み替えられる。

そして、Marcuse(1965=1972)の最後において技術をめぐる支配と解放の両義性が明らかにされる。

技術的理性はその都度の支配的な社会的理性であり、その構造自体変革可能なものである。技術的理性であるかぎり、それはまさしく解放の技術へと転化することができる。(Marcuse 1965=1972: 188-9)

「技術的理性の概念は、おそらくそれ自身イデオロギー」であり、「すでに技術(Technik)というものが(自然に対する、また人間に対する)支配」であるが、「技術(Technik)とはその時代時代の歴史的—社会的な投企(Projekt)」である(Marcuse 1965=1972: 186)。マルクーゼの「技術的合理性」批判は、歴史的に可変的な「支配の合理性」批判へと意識的に読み替えられる。歴史的に可変だからこそ、そこに人間の手が加わる余地が生まれ、その合理化の構造

は「解放」へと反転する。

「技術」は、その用途に関わらず人間や自然を支配する本質を持つ。その一方で、「技術」は歴史的に可変である。この議論の構造には、技術の二つの局面があらわれている。前者の「技術」はイデオロギー的な特徴を帯びた、本質的な局面を指すが、後者の「技術」はむしろ用具としての「技術」（すなわち、中立的な「技術」）の特徴を示す局面である。換言すれば、前者の本質的な技術の性格は「形式的合理性」（＝「技術的合理性」）と代替出来る。そして、形式的合理性を実質的合理性として措定した上で、後者の人為的介入（「投企」）としての「技術」が技術的合理性に代わる別種の合理性の可能性を示す契機となる。

それでは、この「解放の技術」（Technik der Befreiung）とは具体的に何を指すのだろうか。それは美的次元における技術と芸術（technics and art）の一致を指す。「理性がこの機能（筆者補：文明が自然を自身の獣性から解放する機能）を果たすことができるのはただ Technology 以後の合理性としてのみである」（Marcuse 1964=1974: 262）とマルクーゼが述べる時、マルクーゼは、自然を解放的に支配すること（Marcuse 1964=1974: 260）を求めている。そのためには技術と芸術を一致させ、技術的合理性を芸術における「理性の機能」<sup>7</sup>に転化させることが必要となる。

### 3 本稿の視角——テクノクラシー思想の系譜

前節において提示したマルクーゼ技術論の骨子から、技術の二つの性格があらわれる。第一に、形式的・技術的合理性のイデオロギー的性格を粉飾した政治的・経済的統治体制としての

技術（technology）である。この支配とイデオロギーとしての技術（technology）は、すでに技術（technique）の概念と構造の中に含まれている。第二の性格は、その総体としての技術（technology）の支配構造を、人為的に変化させる技術（technics）である。マルクーゼは「道具の世界としての技術（Technics, as a universe of instrumentalities）は人間の力と同じく弱さをも増大させうる」と述べる。この技術の構造的变化の結果は、技術と芸術の一致であった<sup>8</sup>。

以上のようなマルクーゼの立場は、これまで往々にして「技術決定論」「技術還元論」とみなされてきた。例えば、Kellnerによると、Steigerwald (1969) や Offe (1968)、Winner (1977)、Schoolman (1984) の議論は、マルクス主義の経済決定論を脱したマルクーゼを技術決定論者と見なしている（Kellner 1984: 452）。Kellner のこのような評価以外にも、日本の社会学、社会思想史研究者の間でのマルクーゼの評価も、技術決定論者としての評価だったと言えるだろう。（良知 1971; 山之内 1982; 庄司 1977; 平田 1975）そして、Habermas (1968) でも生産力主義者としてのマルクーゼが描かれる。

それでは、技術決定論の何が問題となるのか。その批判の典型例のひとつとして、山之内は、「マルクーゼは、階級利害の対抗を通して理性を貫徹すべき歴史的主体（＝プロレタリアート）の体制内統合をペシミスティックに描写する地点から脱出することができず、ただ残された可能性として、技術的合理性の将来に関するユートピア的希望に賭けるほかないのであった」とし、マルクーゼの議論には人間や自然がそもそも技術と矛盾していること、人間や自然の存続可能性を問わなかった点で限界があると述べる（山之内 1982: 373）。

また、Schoolman はマルクーゼの議論に「技術的理性に完璧に支配され得る個人の性質とは何か」(Schoolman 1984: 179) という問いを投げかけており、構造的要因が精神に与える影響についてマルクーゼは考えていないのではないかと、マルクスのオーソドックスな史的唯物論の枠組に近いマルクーゼの技術決定論 (technological determinism) を批判する (Schoolman 1984: 186)。

支配と解放が「技術」に依存していることを示すマルクーゼの議論の枠組は、社会変革に向かう人間の主体性 (subjectivity) や精神・意識の問題を捨象しているように見えるというのが「技術決定論」の課題と位置づけられるだろう。

しかし、フィーンバーグはマルクーゼにおける技術と主体の問題について、「対象をもっと尊重し、それどころか自然をもう一つの主体と認めるように根本的に変化した、将来の技術の可能性を与えている」(Feenberg 1999=2004: 12) と述べている。このことから、人間と自然、そして技術の関係のなかで「主体」の契機をマルクーゼは捨象していたわけではなく、人間、自然と技術が根本的に矛盾する存在であることを捉えた上で、その克服を「技術」を通して考えていたと見る事が出来るだろう。

本稿はフィーンバーグの説をふまえ、マルクーゼの技術論において主体の可能性が必ずしも捨象されていないとする立場をとりながら、支配と解放という二重の技術決定論者としてのマルクーゼの側面を精確に捉えることを目的としたい。この技術をめぐる思考を辿ることで、経済的生産力に関する限りでの技術決定論者とは位相の異なるマルクーゼの姿を描き出すことができるだろう。そこで本稿は、マルクーゼのこの二重の技術決定論の発想が最初に明確にあらわれた「テクノロジー論文」の読解

を通して、以上の目的を果たしたい。*Studies in Philosophy and Social Science* の最終号に載せられた当該論文について、Geoghegan は、『一次元的人間』における悲観的な技術的合理性批判は、1941年のこの論文にさかのぼることができる」と指摘している (Geoghegan 1981: 64)。

2節で言及したように、1960年代のマルクーゼの技術思想には、技術そのものの性格を追究する本質的思考と、歴史的構成物として技術を捉える思考が混在している。そして解放の技術を指す技術と芸術の一致の思想は、『エロスと文明』を経てあらわれる。

Kellner (2011) は、『エロスと文明』においてマルクスとフロイトの議論を統合させようとした際に1920年代に追究していた美学研究への回帰が起こったと述べるが (Kellner 2011: 50)、この60年代の「解放の技術」をめぐる思想の伏流のひとつには、『エロスと文明』の議論が下敷きにあると思われる。

一方で、本稿で設定した二重の技術決定論の思想圏そのものは、1950年代にフロイト研究を上梓する前に存在していたと考えられる。マルクーゼの知的キャリアは1941年から1956年の『エロスと文明』の頃まで大きく断絶している<sup>9</sup>。フランクフルト学派第一世代において、必ずしも精神分析理論の研究成果を1930年代から40年代にかけてに大きく打ち出したわけではないマルクーゼ<sup>10</sup>が、技術支配はもとより、「解放の技術」をどのように考えていたか。その過渡期の思想を本稿はこの「テクノロジー論文」に見出すことで、戦時期から1960年代にかけてのマルクーゼの思想の一貫性を導き出したい。

「テクノロジー論文」には様々な論点が含まれている<sup>11</sup>。「個人主義的合理性」から「技術的合理性」への転換、機械と労働者の関係性の

逆転、労働者のリビドーが機械体制に吸収されていく状況、産業心理学の発達や科学的管理法（テイラーシステム）の発達、ヨーロッパの労働運動の失敗、大衆の出現と権威主義的官僚制の関係等、論点は多岐に渡る。

その中でも、とりわけ本稿はマルクーゼとヴェブレンの思想的共通性について見ていきたい。その理由は三つある。第一にフランクフルト学派第一世代におけるヴェブレンの注目がマルクーゼに限らずあったこと、第二に戦後のマルクーゼの技術的合理性批判にヴェブレンの議論が参照されていること、第三に、テクノクラシー批判を思想史的に検討する際、両者の議論が参照点となっていることが挙げられる。

第一に、この論文の所収された *Studies in Philosophy and Social Science* には、アドルノの *Veblen's Attack on Culture*（邦題「文化への攻撃」）というヴェブレン論も載っているように、同学派におけるヴェブレンへの関心は大きかったと言える。事実、ホルクハイマーは同雑誌の前書きにおいて、「ヴェブレン—アメリカにおける偉大な社会学的文化批評家—に関する徹底的な研究と熱心な分析が、我々にとって、人間性のカタストロフィックな変動を理解するための良い手助けとなることが明らかになった」（Horkheimer 1941: 365）と述べている。

マルクーゼとヴェブレンとの関係、及びフランクフルト学派第一世代とヴェブレンとの関係への注目は、すでに Tilman and Simich(1980)にて示されている。特に同論文は、マルクーゼとヴェブレンの議論の差異に着目している。

マルクーゼもヴェブレンも、機械過程（machine process）と労働者の関係が逆転している点については同意している。しかし、機械過程が労働者を世俗化させ、平等主義、社会主義的な意識を展開させていく可能性を構想して

いたヴェブレンの研究とは違い、マルクーゼにおいて機械化は解放の可能性と支配の可能性両方を示していた（Tilman and Simich 1980: 641）。

また、マルクーゼの議論の中で暗黙のうちに示されているのは、ヴェブレンは目的・手段の関係を把握し、技術スキルを習得する「技術的合理性」と既存の秩序を批判し、複雑な社会関係を把握するための「批判的合理性（＝個人主義的合理性）」の区別をしていないということである（Tilman and Simich 1980: 643）。

Tilman and Simich は、ヴェブレンとマルクーゼの以上の2つの相違について、前者についてはヴェブレンも権威主義的体制と機械化（技術的合理性）の結びつきに言及しているし、後者についても「批判的合理性」は社会主義の展開の上で重要であることをヴェブレンは認識していたと指摘しており、マルクーゼの議論を批判している（Tilman and Simich 1980: 642-3）。ただし、本稿ではこれ以上マルクーゼとヴェブレンの相違には踏み込まず、マルクーゼがヴェブレンの思想をどのように取り入れていたかに焦点を当てたい。

第二に、共時的な学派の影響にとどまらず、通時的なマルクーゼとの関係を見ることが重要となる。マルクーゼ自身は戦後1958年に *Soviet Marxism*（邦題『工業社会とマルクス主義』）の中でヴェブレンを参照している。マルクーゼは、1952年から55年にかけて、コロンビア大学、ハーバード大学のロシア研究所でソ連政治研究に従事していた。その成果がこの『工業社会とマルクス主義』である。

同書の「新しい合理性」と題された章で言及されるのは、「西欧社会とソヴェト社会」の共通点である。それは「後期工業文明の普遍的特徴」であり、「中央集権化と統制化が、個

人的経済と自律にとってかわる」(Marcuse 1958=1971: 84) という事態である。この個人主義的合理性から技術的合理性への転化は、「テクノロジー論文」における主題のひとつであり、1940年代初頭の全体主義・テクノクラシー分析の関心の継続を思わせる。ここでマルクーゼは、技術発展の結果生じる二つの拮抗する要素を述べている。

(1) 労働の機械化と合理化は、つねにより大規模に、個体のエネルギー(と時間)を、物質的労働過程から解放し、物質的生産の王国の彼岸において、人間的諸力の自由な遊びのために、それらエネルギーと時間とを用いることを可能にする。そして、(2) 上記の機械化と合理化は、標準的画一性と機械への正確な服従という、自律性と自発性よりは適応と即時的反応を要求する行動様式をもたらす。(Marcuse 1958=1971: 86-7)

とりわけ、(2) の技術による合理化はヴェブレンの *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (1914年刊行。邦題は『ヴェブレン 経済的文明論—職人技本能と産業技術の発展—』である。以下『職人技本能』と呼ぶ。) を参照しており、「テクノロジー論文」で同様の箇所を参照していることとあわせると、この点をマルクーゼは重要視していたと言える<sup>12</sup>。このように、ヴェブレンとの思想的共鳴が戦時期を挟み、1950年代の著作まで続いていることが言えるだろう。

第三に、1節で述べたように、マルクーゼの思想が1960年代後半に受け入れられた文脈のひとつには、テクノクラシー批判があった。この戦時期に書かれたマルクーゼの技術思想を見ることで、1960年代に噴出するテクノクラシー

批判の伏流のひとつが明確になる。そして、テクノクラシー批判の文脈で参照されるマルクーゼとヴェブレンの双方に、思想的類似性があると考えられる。

科学史家の中山茂は、政治社会体制が技術をいかに管理—保護と規制—するかという「技術制度化の思想」を論じるにあたって、その一例としてテクノクラシーを挙げている(中山 1994: 214)。1930年代に流行したテクノクラシー思想の源泉は、ソースタイン・ヴェブレンの経営合理化の思想にあり、煎じ詰めればその思想は「資本主義を管理規制するには資本家よりも技師がよい」とする思想である<sup>13</sup>(中山 1994: 226)。

ただし、ジャン・メイノーの議論を見ると、ヴェブレンがテクノクラシー思想の源流であることと、ヴェブレンの思想を受けて発展していった思想運動としてのテクノクラシー思想とは若干性格が異なるのではないと思われる。メイノーがヴェブレンの思想を「彼の思想体系の本質をつくる観念は、社会は経済生活の組織化という課題のためには、企業家にかわる技師団を補充せざるをえないということである」(Meynaud 1964=1973: 233) と要約しているように、資本家よりも「技師」の方に資本主義の管理を担わせることを考えていた点は、中山とも同じと言えよう。営利をあげることにのみ血眼になる資本家よりも、技師の方がよい。それは「正確さと精密さの尊重を習性としていることから、技師の唯一の関心事は、経済機構の規則正しい進行を確保することにある」(Meynaud 1964=1973: 232) からである。しかし、思想運動としてのテクノクラシー思想は、ヴェブレンの著作に依拠したハワード・スコットの影響下にもあった(Meynaud 1964=1973: 233)。

フィーンバーグは「1960年代の学生運動や対抗文化は、彼らがテクノクラシーの勝利と見なしたもののへの対抗手段として、自主管理と参加型民主主義を要求した。近代社会は、経済開発ではなく、技術的支配によって損なわれていると考えられたのである。この背景から、なぜマルクーゼの『一次元的人間』やその他の同様に悲観主義的な社会批判が人気を博したかが説明される」(Feenberg 1999=2004: 151)と述べる。中山のテクノクラシー思想に関する1960年代の時代認識(中山 1994: 228)にも同様のことが述べられている。

このテクノクラシー思想への批判は、総じて1960年代に拡大していったと見ることが出来るが、学生運動を理解する上で欠かせない背景であると同時に、その思想への批判の萌芽・伏線自体は少なくともマルクーゼが同論文を刊行した1941年頃にまで遡ることが出来ることにも注目したい。

#### 4 戦時期におけるマルクーゼの「技術的合理性」批判

マルクーゼ「テクノロジー論文」の概要を見ていこう。まず、マルクーゼは技術(technology)について以下のように述べている。技術は、「生産様式として、機械時代を特徴づける道具、デバイス、仕組みの全体性として存在すると同時に、社会関係や、普及している思想や行動のパターンの現れ、コントロールと支配のための道具を組織し、永續させ、(または変容させる)様式」(Marcuse 1941:414)であると定式化している<sup>14</sup>。

人間は機械を發明し使用するだけでなく、その適応や使用を方向づけるという社会集団であるという意味で、人間は技術(technology)に

不可欠な要素である。技術(technology)とは、単なる産業や輸送、コミュニケーションの装置としての技術(technics)にとどまらない、社会的な過程であるとマルクーゼは位置づけている(Marcuse 1941:414)。technologyとしての技術とtechnicsとしての技術を分けて考えることは、『一次元的人間』と共通していると言える。

この社会過程としての技術(technology)がナチズムにいかにか奉仕しているかをマルクーゼは検討している。その際、「第三帝国は『テクノクラシー』の形式である。」(Marcuse 1941:414)と言及していることに注目しよう。

労働(labor)、プロパガンダの増強、若者・労働者の訓練、政府・産業・党の官僚制組織—これらすべてが日常的なテロルの手段を構成する—が、一連の多大なる技術的(technological)な効率に追従する。(Marcuse 1941:414)

この国家社会主義下の戦争経済に奉仕するテクノロジーの社会的な過程は、マルクーゼの言葉で言えば「暴力主義的テクノクラシー(terroristic technocracy)」(Marcuse 1941:414)と呼ぶことができるだろう。

マルクーゼは、「全体主義国家観におけるリベラリズムとの闘争」において、「全体主義国家は、リベラリズムの基本構造を全面的に容認しているのである。この構造の基盤は、私的所有ないし経営者の私的イニシアティブの尊重にもとづく私経済的社会組織であった」(Marcuse 1934[1965]=1969: 35)と1934年に述べているが、ここではその分析を一步進めているように思われる。つまり、私経済の領域における組織の分析をテクノロジーと政治権力の結合に着

目して行っている点が1941年のこの論文において見られる。

それでは、このような第三帝国のテクノクラシーはどのようにして生まれたのか。鍵となるのは、「個人主義的合理性」が「技術的合理性」に変容したことであると言える（Marcuse 1941:417）。

16世紀、17世紀に形成された個人主義の原理が自己利益（self-interest）の追求にあることを踏まえながら、マルクーゼは、自己利益は個人の合理的で自律的な思考によって絶えず導かれると述べる（Marcuse 1941:415）。

ただし、この自己利益は、個人の直接の自己利益とは合致しない。この個人の自己利益は、外部の権威によってもたらされる社会秩序の基準に依存している（Marcuse 1941:415）。

外部の権威に依存しない、自己利益追求のための個人主義の原理が「個人主義的合理性」であると言えるだろう。この合理性を満たすためには、「適切な社会的、経済的環境」（Marcuse 1941:416）が前提となる。この「適切な社会的、経済的環境」が自由競争の領域である。

「自由競争の領域では、個人の生産物や実績を社会が必要とするものの一部にするような個人の実体的な達成は、個人の個性の痕跡である」（Marcuse 1941:416）とマルクーゼが言うように、自己利益を追求する競争のなかで成し遂げたもの、生産物が個人を個人たらしめている。加えて、この個人の痕跡が社会にとって必要なものとなる。ここでは、決してブルジョア市民社会に個人が従属するのではないということを行わんとしている。

しかし、この必需品の生産過程はやがて自由競争の領域という経済的基盤を掘り崩す結果となる。マルクーゼは、「成立した社会の自然に対する支配のなかで、自由経済の主体を撤

廃する機械産業における巨大な企業の支配のもとで、機械化と合理化は、弱い競争者を打ち負かす」（Marcuse 1941:416）と言う。市民社会の市場経済下における自由競争が進行することで、競争の中での淘汰が同時に進んでいく。そして、競争の中で効率性を突き詰めていくことが、高度な生産設備の導入と合理化を促し続けていく。この過程、まさに技術（technology）という社会的な過程を経て、「技術的権力は、経済的権力の集中になりやすい」（Marcuse 1941:416）のである。結果として、自由経済下の主体は巨大組織における客体となる（Marcuse 1941:417）。

自由経済下の主体は、テクノロジーを通じた社会関係の中で、自己の利益を追求するはずであったが、その過程のなかで競争原理が働き、高度な生産技術を用いることのできる生産者が持つ使用者としての権力の集中と、その生産技術を用いることによって生じた経済的利益が織りなす経済的権力の集中が並行して生じたと言えることができるだろう。

それでは、「テクノロジー論文」は『一次元的人間』の技術論とどのように関係しているだろうか。繰り返すように、双方の議論の特徴はテクノクラシー批判にある。「技術(的合理性)」と「政治(的合理性)」の結びつきを批判する際に、「技術」を個々の用具としてのそれではなく、社会的生産過程の総体として捉える視座も共通している。

他方で、「個人主義的合理性」に基づく経済活動の結果、経済的権力の一極集中が起こり、前者の合理性が「技術的合理性」へと転化するという視点には、「技術的合理性」以後の別の合理性を模索する視点は見られず、個人主義的合理性に見られる批判的機能を擁護するに留まっているように思われる。『一次元的人間』に見

られる、「理性の機能」の美学的・芸術的転回はこの頃には見られない。

以上のような同異を踏まえた上でヴェブレンの思想との関係を見ると、マルクーゼの1940年代から60年代にかけての技術による支配と解放の視点の一貫性だけでなく、技術による解放の契機の違いが見えてくる。

## 5 ソースタイン・ヴェブレンの受容

マルクーゼは「テクノロジー論文」においてヴェブレンの著作を二つ参照している。ひとつは先に見た『職人技本能』であり、もうひとつは *The Engineers and The Price System* (1921年刊行。邦題は『技術者と価格体制』、以下『価格体制』と呼ぶ。) である。それぞれの著作をどのように見ていたか、順に考えていきたい。

『職人技本能』について、マルクーゼは第七章「機械産業」を主に参照している。この章では、手工業 (handicraft) から機械工業 (machine industry) へ移行する時代の中であらわれた様々な新しい特徴が描かれている。それは例えば、以下のような言明に表されている。

この新しい時代には、技術 (technology) は科学と密接な関係を持つようになる。そして、この新しい時代の科学と技術は共に、すべての先例以上に、即事実的な性格を持っている。(Veblen1914=1997: 249)

マルクーゼが注目するのも、この「即事実的な性格 (a matter-of-fact character)」である。まず、個人主義的合理性の体現者であった経済主体の自由が、徐々に効率性に侵食されていくなかで「世界は合理化され、この合理性 (筆者注: 技術的合理性) は、個人が留保無しで順応

する社会的権力となり」、「ヴェブレンははじめて、新しい即事実性を機械過程から引き出したが、その機械過程から新しい即事実性は社会全体に広がっていった」(Marcuse 1941: 418) とマルクーゼは語る。マルクーゼが言う、ヴェブレンが引き出した「新しい即事実性」とは一体なにか。

マルクーゼが『職人技本能』から引用した箇所を通して述べていることは、①機械産業の発達により労働者の役割が機械の補助になったこと (Veblen1914=1997: 252)、②労働者に求められる技能が量的に物事を把握する能力になったこと (Veblen1914=1997: 254) である。これらが、マルクーゼがヴェブレンから読み取った「新しい即事実性」である。

これを受けてマルクーゼは、「即事実性」と「新しい即事実性」の違いについて言及する。前者の「即事実性」は、機械過程と結びついておらず、「すべての社会的生産の形態のもとで、現実を構成する事実から動機と目標を得、正当化する」ものである (Marcuse 1941: 418)。ここから、「古代の唯物論」「快樂説」<sup>15</sup> が活発になり、近代の物理学と精神的抑圧の闘争が生じたとする。ここには、1938年の「快樂説批判」における個人の欲求や幸福の展開に対立する理性という論点が反復される。

一方、後者の「新しい即事実性」は機械過程と結びついたものである。これは、人の思考と行動を方向づけるものであり、人間の必要 (needs) や潜在力に対応していない (Marcuse 1941: 418)。

次にマルクーゼは「発明の母である必要は、大いに装置 (apparatus) を維持し拡大することの必要である」と前置きをした上で、ヴェブレンの以下の箇所を引用する。

それら（筆者注：発明）の主要な役割は企業に役立つことにあり、産業に役立つことにあるのではない。そして、そうしたものの利用による社会的快適さの増進、促進が他の者にとって義務となることによって、それらはよりいっそう広く利用されるようになる。（中略）一人の競争者が技術的便宜を得ると、他のすべての者は敗北を恐れ、ただちにそれを必要とするようになる。（Veblen1914=1997: 258）

これを受けてマルクーゼは、「すべてが、人間の本能（instinct）、欲望（desire）、そして思考を、装置を満足させる方向に変化させるよう協同する」とコメントをする（Marcuse 1941: 420）。言い換えれば、機械を使うはずの人間が、機械に使われる事態を指す。

ここで、ヴェブレンが注目する「本能」という概念に着目しよう。ヴェブレンにとって「本能」はどのような意味を持っていたか。ここでの「本能」は「職人技本能」のことに他ならない。ヴェブレンは以下のように述べる。

制度の発生論的研究は、物質的環境と人間の生得で持続的な諸性向とによって規定されている習慣や因襲の成長に取り組むことになるのであり、文化的成長の相互関連に影響を与えるこれらの性向に対しては、他の分野では時代遅れとされる「本能」（instinct）という述語ほど役に立つものはないのである。（Veblen1914=1997: 4）

ここでの「本能」は生理学的・機械論的に捉えられる原初的な人間の反応を指すのではない。「向性的な活動と対極的に区別される『本能』は、意識と目指された目的への適応とを含

んでいる」（Veblen1914=1997: 5）のであり、「より単純でより即時的な衝動——『向性的』と名付ける方がより有効かもしれない衝動——」（Veblen1914=1997: 6）とは違い、ある目的を達成するための行動について示された用語である。職人技本能は、「人類の物質的福利に直接貢献し、したがってその生物としての成功をもたらすような本能的性癖」（Veblen1914=1997: 22）のなかでも重要なものとして位置づけられる。人間の物質的な幸福に役立つ意味での「本能」のなかでも、「職人技本能」の位置づけは特別なものである。

「職人技本能の機能的内容は、その目的がどんなものであろうとも、とにかく生活の目的に対して役立つことなのだが、実は、職人技本能が助ける目的は、概して、他の様々な本能的性癖によって決定され価値づけられる」（Veblen1914=1997: 26）とヴェブレンは述べる。ここで強調される職人技本能の特徴は、他の本能（新性性向、暇な好奇心）と複雑に連関しあうものである。この職人技本能は、「他のより基本的な本能的性癖と競争しながら」抑制されることもあれば、展開することもある（Veblen1914=1997: 28）。職人技本能は「実際の工夫、方法と手段、効率と節約への方策と計画、熟練、創造的な仕事、そして事実についての技術的な精通と関わりを持つ」（Veblen1914=1997: 28）のだが、ヴェブレンは職人的な手工業に強い思い入れを持つ<sup>16</sup>。

まとめると、マルクーゼは「装置を満足させる方向に」本能が水路づけられることを批判しており、ここで擁護されている本能は生理学的な本能というよりも、人間の幸福に資する手工業を念頭に置いたヴェブレン的な「職人技本能」だったと言えよう。

上で見たように、マルクーゼは「古代の唯物

論「快樂説」に一定の評価をしていることがうかがえる。それは1938年のマルクーゼの論文「快樂説批判」においてもそうであった。マルクーゼは「快樂説批判」で展開した論点を、この1941年においてヴェブレンの思想と接合させたとも考えられる。

マルクーゼが想定している「技術と欲求の関係」を見てみよう。「快樂説批判」においては、本能という用語は使用されないものの、注目すべき文言は以下の通りである。

近代技術のうちには (In der modernen Technik)、物体や身体の可動性・美・柔軟性を引き出し、それを身近なものにし、使用するものにするための、あらゆる方法が備わっている。同時に、この可能性に対応する欲求 (Bedürfnis) と、さらにこれらの欲求を受け容れることのできる感覚器官が形成された。(Marcuse 1938[1965]=1969: 217)

この技術と欲求の関係が物体、身体の潜在性を引き出し、さらにその潜在性に対応する「欲求」があるとする考えには、ヴェブレン的な「職人技本能」との共振が見られる。ヴェブレンの「本能」が生理学的な反応ではないことを踏まえれば、人間・自然の潜在力を引き出し、展開させようとするマルクーゼの技術観は、ヴェブレンの効率性・創造性を追求する目的論的な技術の効率的使用と通じるようにも思える。マルクーゼが「本能」を具体的に論じるようになるのは『エロスと文明』からであるが、この「テクノロジー論文」では、フロイトの文明論における本能の議論よりも、ヴェブレンを介した形で目的論的な技術使用と本能・欲求の関係を考えていたと言える。

「テクノロジー論文」に戻ろう。それでは次に、

『価格体制』はこの論文においてどのように参照されていたのか。具体的には、第四章「革命的転覆の危険について」の一節である。マルクーゼは、「批判的思考の社会的重要性は、反対の重要な地層が長い間一反対の権利を失うことなく一、装置それ自身に統合されてきたという事実によってさらに促進されている」(Marcuse 1941: 425) と述べる。この「反対の重要な地層」とは労働運動のことと言い換えてもよいだろう。ここでマルクーゼが念頭に置いているのは、アメリカ労働総同盟 (American Federation of Labor、略称 A・F・L) である。マルクーゼが引用するのは以下の節である。

A・F・L はそれ自体、その他の組織と同じように、それ自身の特権や利益の幅をひろげるためにいつでも戦おうとしている特権階級のひとつである。(中略) アメリカ労働総同盟は、それ自身の既得権を有する事業組織である。それは、他の特権階級によっておこなわれる普通の管理の仕方とまったく同じように、価格を維持し、供給を制限することを目的とするものであって、生産的産業を管理するためのものではなく、いわんや、ある企業によって生産される財貨の生産高を増加せしめるためのものでもない。(Veblen 1921=1962: 88-9)

ヴェブレンは、この『価格体制』においてアメリカの産業体制の分析を行なった。第四章に限って言えば、アメリカ労働総同盟の話が引き合いに出されたのは、ロシアのボルシェヴィズムを意識してのことである。しかし、アメリカにおいてはロシア革命のような事態は起こりえない。

アメリカの産業状況においてまず指摘せねば

ならないのは、当時のアメリカ産業における所有と経営の分離の進行である。「金融の将帥は、かれらのために金をもうけてくれる技術者をやむをえず雇用しつづけたが、しかし、かれらは、いやいやながらに、また抜目のない打算によって、そうしただけであった」(Veblen 1921=1962: 65) と言うように、産業技術の発達と同時にその技術の専門化が進み、産業経営においてはその技術者の力が必要不可欠とされる一方で、金融資本家・企業家との対立が生じた。このような状況のなかで、アメリカ労働総同盟の位置づけは、生産を規制する企業家—過剰生産を規制することで価格と利潤を維持する—の側に近い。ヴェブレンは五章「変革を助長する状況について」で以下のように述べる。

アメリカその他の先進工業国における革命的転覆の問題は、実際問題としては、技術者のギルドがなにをやるかという問題に帰着する。実際、それは、この国の産業経営の決定権や責任が、特権階級を代辯する金融業者から、継続体としての産業体制を代表する技術者へと移ってゆくかどうかの問題である。(Veblen 1921=1962: 129)

このように、労働者ではなく、また金融業者にもよらない、技術者による評議会を構想するのがヴェブレンの特徴であった。ところで、マルクーゼはヴェブレンのアメリカ労働総同盟の節を受けて、労働運動の位置づけの変化を論じている。

機構の組織的・心理的パターンと同化する傾向は、ヨーロッパにおける社会的反対の構造における変化を引き起こす原因となる。該当の批判的合理性は、その組織の技術的合理

性に従属しており、それによって、思想と行為の既定のパターンを超える要素を排除した。この過程は、大規模産業と軍の依存の伸長という明らかに避けられない結果となった。(Marcuse 1941: 425-6)

上記のように、マルクーゼが技術使用に関する観点をヴェブレンとある程度共有しているのに対し、ヴェブレンがその発端となったテクノクラシー運動については、マルクーゼは「第三帝国はテクノクラシーである」と定めた上で批判するのである。もちろん、ヴェブレン自身はテクノクラシー運動のきっかけとなったに過ぎないということは付け加えておくべきであり、ヴェブレンとマルクーゼの共通点を指摘することと、マルクーゼに批判されるテクノクラシー運動の潮流とは議論の位相を別にするのであろう。マルクーゼがファシズムについて言及している箇所に戻ると、以下のようなことを述べている。

私的な官僚制は、特定の利害と共通の利害の間のごまかしの調和を助長する。私的な権力の関係は、客観的な事物の間関係としてだけでなく、合理性のルールそれ自体としてもあらわれる。

ファシストの国においては、このメカニズムは、私的、準私的(党)、公的(行政)官僚制の合併を促進する。(Marcuse 1941: 431)

これがまさに、マルクーゼが批判の遡上に載せたドイツのテクノクラシーに他ならない。「技術的な過程それ自身は、このような集散主義(筆者注：ここではファシズムのことを指す。)を正当化しない」(Marcuse 1941: 436) と述べる。

ここでは、「技術」をめぐる独特な議論が展開される。まず、ここではっきりとマルクーゼが述べているのは、「技術 (technics) の敵は、容易く暴力主義的なテクノクラシーに協力する」(Marcuse 1941: 437) ということである。

ドイツのテクノクラシーにおける、技術 (テクノロジカル) 的合理性の契機を批判していたはずであったが、ここで技術 (technics) 自身を擁護するような言明を見せている。ここで注意しておきたいのは、マルクーゼが批判していたのは、あくまでも「合理性」の一変種である「技術的合理性」であり、技術それ自身には何らかの形で期待をかけていたのだった<sup>17</sup>。

マルクーゼの議論の筋道をたどることで、ヴェブレン的なテクノクラシー思想への共感をマルクーゼは示しており、他方でその思想から逸れていった軍産複合体としてのドイツ・テクノクラシーにマルクーゼは批判的であった、ということが言える。

以上のように考えるならば、マルクーゼがヴェブレンの「職人技本能」に共感を示していたということから、「技術」と「労働」の関係をマルクーゼがどのように捉えていたかということについて、ひとつの示唆が得られるだろう。

それは技術 (technics) と「労働」の一致である。つまり、「手工業」への憧憬が、マルクーゼの思想から浮かび上がってくる。「テクノロジー論文」においてあらわれる「個人主義的合理性」「批判的合理性」の持主の理想型は、職人 (Workman) にあったのではないだろうか。

ヴェブレンにおいて機械産業の体制は、産業資本家によって統制され、効率的な金勘定の世界であるだけでない。機械産業においては「人格のないし目的論的な要素がなんら入ってこない機械過程の論理」が通常なのであった

(Veblen 1914=1997: 249)。

「人格的要素」が入りこむ手工業とは、ヴェブレンの言葉で言えば「擬人説的帰属」である。ヴェブレンは「職人が常に道具や原材料のすぐその場での管理にあたっており、仕事の中で利用される運動は本質的に手による操作の性質を持っていて、そこでは職人は、原材料に彼の目的に適うような形と関連を持つよう器用に強いていき…」(Veblen 1914=1997: 250) と述べる。技術、生産のための道具を手につかみ、材料を加工し何かを生み出す時、技術と労働が結びつく。

マルクーゼが、「快樂説批判」のなかで、近代技術が物体や身体的美を引き出す可能性を持つ点を評価していることは先に述べた。「テクノロジー論文」(そして「テクノロジー論文」と関連の深い「快樂説批判」)において、「技術的合理性」を乗り越える「技術による解放」とは、労働者の労働 (=主体性) と結びつく技術の合理的利用と、「個人主義的理性」 (=「批判的理性」) の担保にあったのだと考えられる。この「技術と労働の一致」は、1960年代に至り、「技術と芸術の一致」に照準が移る。

先に見たように、マルクーゼは1960年代に「技術と芸術」の一致による美的次元の解放を説いていたが、この頃には、「労働」が「技術」による手工業的な自然の事物とのやりとりを通じて、美的次元にいたるといふ道が開かれる。

以上のように考えると、マルクーゼは、ヴェブレンの定義するところの「工業体制」主義者やナチス・ドイツのような全体主義的テクノクラシー主義者では無い。ただし、労働と技術が一致する手工業的な感覚を重視する限りにおいて、構想力や想像力を媒介した「生産力」の発展が「技術的合理性」を乗り越えて「満足の合理性」(rationality of gratification)<sup>18</sup> (Marcuse

1956=1958: 142) へと転化させることは十分に彼の思想の中から導き出せることではないだろうか。ただし、「テクノロジー論文」の頃にはその思想的萌芽を示唆していたとは言え、この「満足の合理性」の視点を明確に展開されることは無かったと言えよう。

## 6 おわりにかえて

本稿は、まずマルクーゼの1960年代の技術論を『一次元的人間』を中心に確認した。ここでは技術による支配と解放の二つの局面が示された。同時に、技術による(技術的合理性からの)解放とは、芸術による美的解放のことを示し、合理性の機能を生かしたまま、別の理性を担保する視座が示された。

この技術における支配と解放の両義性を、本稿は単に技術使用による支配と解放として捉えてはいない。個々の用具としての技術を超えた、本質としての技術(technology)、本質としての人間と自然の支配を、1960年代であれば「技術と芸術」(technics and art)、1940年代初頭であれば「技術と労働」(technics and labor)というように、別の行為と結びつけることで技術による解放を目指したということマルクーゼの思想から導き出すに至った。とりわけ、上記の含意、及び二つの時代の思想の連続性と断絶を、1941年の「テクノロジー論文」におけるヴェブレンとの思想的類似性に着目することで示してきた。

技術の二重決定論という視点からマルクーゼの思想体系を再構成する手がかりを整えた一方で、本稿は以下の課題を有している。第一に技術と結合する「労働」や「芸術」の内実、そして「労働」や「芸術」に携わる主体性の内実を探ることが求められる。1940年代初頭の議論

において、1930年代初頭にかけての初期マルクス研究、そして1930年代後半のホルクハイマーの初期批判的社会理論の綱領に示される労働や生産の概念とマルクーゼの議論の関係性を問うことが必要になる。加えて、芸術や美的次元の考察についてフロイト論である『エロスと文明』との関係性を精査する必要、理性という主題については「テクノロジー論文」と時期を同じくして刊行されたヘーゲル論『理性と革命』(1941年)を読み直す必要があるだろう。

しかしながら、経済的な合目的行為としての生産力から技術や労働の美的な潜在性を救い出すことに戦時期のマルクーゼのテクノクラシー批判の主眼はあり、その思考の基層は、労働から芸術への美的転回を経たものの、1960年代末の先進産業社会に対する批判的思想へと受け継がれていったということを確認することは、上記の課題を検討するための可能性を切り開くのである。

## 注

<sup>1</sup>Abromeit(2004)は、マルクーゼの評価は1960年代の抵抗運動に関与したことによって大きく規定されており、マルクーゼに言及することは彼の批判理論そのものへの反応よりも1960年の学生運動への反応を喚起することが多いと述べる(Abromeit 2004: 1)。

<sup>2</sup>第二次大戦後に展開したハイデガーの技術論はマルクーゼにも影響を及ぼしたと言われる。フィーンバーグが言うように、ハイデガーの技術の捉え方は「技術自体説」と言うべき悲観的なものであり、技術の中に原初的な支配の契機を見出すこの捉え方によって、技術を人の手が介入しない「本質主義」的なものとしてみなす傾向が強い(Feenberg 1999=2004: 7)。

<sup>3</sup>フィーンバーグの議論を踏まえて、直江(2014)

は、マルクーゼのユートピア的・美的構想力を技術や人工物の民主的なデザインへと接合させるフーバーの試みが、東日本大震災を経由した現代社会の中での一つの理論的指針になりうると評価しつつも、この議論をより展開させ、人間と自然の関係が常に人間の予測を超える非対等的な関係であることを常に技術の哲学に組み込むべきだと述べる（直江 2014: 40）。

<sup>4</sup> この論文は、*Studies in Philosophy and Social Science*, 1941年第3号に収められた論文である。刊行自体は1942年3月である。

<sup>5</sup> マルクス、ウェーバー、ルカーチの議論がマルクーゼの「技術的合理性」の議論の源泉として位置づけられる一方で、ホルクハイマーの「道具的理性」の議論との関係性を見ることも重要となるが、本稿では論旨を明確化するためにこの論点は別稿に譲りたい。なお、ホルクハイマーとウェーバーの合理性概念をめぐる影響関係、とりわけウェーバー『職業としての学問』における「合理性」と『啓蒙の弁証法』や『理性の腐食』で見られる「啓蒙」の近似関係については保坂（1997）を参照。

<sup>6</sup> 同論文のもとになった報告は、ハイデルベルクで1964年4月28日から30日にかけて開かれた第15回ドイツ社会学会の3日目になされたものである。報告の仔細については徳永（1964）を参照されたい。Stammer（1965=1980）にはマルクーゼの元報告が収録されている。

<sup>7</sup> 「理性の機能」は、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド『理性の機能』（1929）からの影響下にある。マルクーゼは、ホワイトヘッドの「理性」の進化論的性格に共感を示しているように思われるが、ここでは立ち入らない。

<sup>8</sup> 『一次元的人間』の邦訳においては、technologyはテクノロジー、techniqueとtechnicsは技術として訳されている。

<sup>9</sup> 1941年の*Reason and Revolution*（邦題『理性と革命』）

以降、1948年の*Existentialism: Remarks on Jean-Paul Sartre's L'Être et le Néant*、そして書評以外は『エロスと文明』まで表立った論文・著書の公刊は無い。1942年末頃から1945年にかけてのアメリカ・Office of Strategic Serviceでの政府協力についてはLaudani eds（2013）を参照。

<sup>10</sup> ロビンソンによればマルクーゼがフロイトを読み込むようになったのは1936年のスペイン内戦、モスクワ裁判の頃であり、それはマルクスがかけていた革命への期待以上に急進的・批判的な概念を求めてのことだった（Robinson 1969=1983: 182）。

<sup>11</sup> この中で、後に扱うソースタイン・ヴェブレンの著作だけでなく、フロリアン・ズナニエツキの*The Social Role of the Man of Knowledge*（1940）、エミール・レーデラーの*The State of the Masses*（邦題『大衆の国家』）（1939年）、ロバート・F・ホクシー*Scientific Management and Labor*（邦題『科学的管理と労働』）（1915年）等の議論を参照している。

<sup>12</sup> ただし、ここで「技術による解放」と「技術による支配」という対立は、抽象度を上げてあらわされていることに注意しよう。「社会的進歩は、こうして、広く個体の自律性に、つまりは、主観的理性と客観的理性の差違と緊張によって、そして、客観的理性（社会的必要と社会的利害）は主観的理性（個人的必要と個人的利害）を認め発展させるという形での、この緊張の解消によって、左右される」（Marcuse 1958=1971: 86）と述べる時、「技術による解放」と「技術による支配」という対立がそれぞれ、個人的利害と社会的利害の対立に換言されているのである。個人の存在を統合し満たすのか、社会全体を統合するのか、このような個人と社会の間の緊張関係が、技術的合理性を媒介して展開される。

<sup>13</sup> 中山の概説的論文では扱われてはいないが、ジャン・メイノーは、テクノクラシー思想の流れを、サ

ン・シモン主義から語り始める。「科学に対する信仰、とくに抽象に対して実証的観念を優越させている社会組織の科学に対する信仰」(Meynaud 1964=1973: 227-8)がその思想の根幹であるサン・シモンのテクノクラシー思想は、「産業者階級——つまり生産者だけに、最高の地位につき、しかも意思決定を下す責任を限定している」(Meynaud 1964=1973: 227)のであり、「本質的に現代の諸制度の代表であり団体利益中心主義の代表でもあるテクノクラシーの教義と多くの点で共通する、いわばビジネス的テクノクラシーだという点は認めざるをえない」(Meynaud 1964=1973: 227)のである。テクノクラシー思想の源流や、その思想を支えた高等教育制度など、様々な議論はあるが、ここではヴェブレンに関してだけ触れる。

<sup>14</sup> この定式化においては、1936年にルイス・マンフォードが刊行した *Technics and Civilization* (邦題『技術と文明』)からの影響も伺える。

<sup>15</sup> マルクーゼは「快楽説批判」の中で、個人の幸福と理性の対立を、古代の快楽主義的哲学(キレナイカ学派、エピクロス学派)に遡り考察している(Marcuse 1938[1965]=1969: 188-9)。観念論哲学の社会的実践への転化という西欧マルクス主義の論点について、古代の快楽主義哲学を媒介にしながら論じている点で「他にない独自の唯物論的ニヒリズムを形作っている」(出口 2002: 181)。「快楽説の唯物論的抵抗」、及び「快楽説批判」から

1960年代のマルクーゼの思想の連続性についても出口(2002)を参照。

<sup>16</sup> 稲上は、ヴェブレンが「とりわけ製作者本能の優劣あるいは盛衰に深い関心を注いでいる」のは、「それが社会の産業技術のあり方を規定するだけでなく、その優位が入びとに勤勉と創意工夫を促し、無駄と浪費をなくし、社会を平和なものにしていく可能性が高い」とみなしていたからであり、ヴェブレンは「ゆるぎないインダストリアリスト(産業主義者)」だったと述べている(稲上 2013: 382)。

<sup>17</sup> ドイツのテクノクラシーとヴェブレンの思想そのものとは差異があることを確認しておこう。戦時期におけるドイツのテクノクラシー思想についての研究をしている小野清美は、ドイツ・テクノクラシー運動には「国家=政治」が理想社会建設の要因として含まれており、国家機構を社会秩序から排除して考えていたヴェブレンのテクノクラシー・モデルとは違うと述べる(小野 1996: 67)。

<sup>18</sup> エロスと文明』において、美の感覚は「直観」、「『受容性』、つまり、与えられた対象によって触発される認識」(Marcuse 1956=1958: 161)であり、快感なのであると述べる時、ここでは基本的に美学や芸術が、「理性の抑圧的な支配にたいする対抗」である(Marcuse 1956=1958: 165)。理性の抑圧的な支配を脱現実化することが、「世界を満足の合理性によって規定し直す」ことであった(Marcuse 1956=1958: 142)。

## 文献

- Adorno, Theodor W., 1941, "Veblen's Attack on Culture," *STUDIES IN PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE*, 6(1): 389-413. (= 1995, 渡辺拓邦・三原弟平訳「ヴェブレンの文化攻撃」『プリズメン』筑摩書房, 99-136.)
- 出口剛司, 2002, 「革命的個人主義と68年のマルクーゼ——唯物論的ニヒリズムの社会的構想力」唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第7号 所有をめぐる<私>と<公共>』青木書店, 178-200.
- Feenberg, Andrew, 1988, "The Bias Of Technology", Robert Pippin, Andrew Feenberg, and Charles P. Weibel eds., *Marcuse: Critical Theory and the Promise of Utopia*, Massachusetts: Bergin and Garvey Publishers, 225-56.

- , 1999, *Questioning Technology*, London: Routledge. (= 2004, 直江清隆訳『技術への問い』岩波書店.)
- Geoghegan, Vincent, 1981, *Reason & Eros: The Social Theory of Herbert Marcuse*, London: Pluto Press.
- Habermas, Jürgen, 1968, *Technik und Wissenschaft als >Ideologie<*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= [1970]2000, 長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社.)
- 平田清明, 1975, 「個体的所有概念との出会い——労働と所有のディアレクティーク——覚え書 (上)」『思想』617: 103-25.
- Horkheimer, Max, 1941, “Preface,” *STUDIES IN PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE*, 6(1): 365.
- 保坂稔, 1997, 「啓蒙と合理性——ホルクハイマーとウェーバー」『年報社会学論集』10: 13-24.
- 稲上毅, 2013, 『ヴェブレンとその時代——いかに生き、いかに思索したか』新曜社.
- Kellner, Douglas, 1984, *Herbert Marcuse and the Crisis of Marxism*, London: Macmillan.
- Kellner, Douglas, Tyson Lewis and Clayton Pierce, 2011, “Introduction: Herbert Marcuse, Philosophy, Psychoanalysis and Emancipation,” Douglas Kellner ed., *Philosophy, Psychoanalysis and Emancipation: Collected Papers of Herbert Marcuse Volume Five*, London and New York: Routledge, 1-75.
- Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Marcuse, Herbert, 1934, “Der Kampf gegen den Liberalismus in der totalitären Staatsauffassung,” *Zeitschrift für Sozialforschung*, 3(2): 161-94. Reprinted in: Herbert Marcuse, 1965, *Kultur und Gesellschaft I*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1969, 田窪清秀ほか訳「全体主義国家観におけるリベラリズムとの闘争」『文化と社会 (上)』せりか書房, 23-82.)
- , 1938, “Zur Kritik des Hedonismus,” *Zeitschrift für Sozialforschung*, 7(1-2): 55-89. Reprinted in: Herbert Marcuse, 1965, *Kultur und Gesellschaft I*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1969, 田窪清秀ほか訳「快樂説批判」『文化と社会 (上)』せりか書房, 185-238.)
- , 1941, “Some Social Implications of Modern Technology,” *STUDIES IN PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE* 6(1): 414-39.
- , 1956, *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, London: Bacon Press. (= 1958, 南博訳『エロスの文明』紀伊國屋書店.)
- , [1958]1960, *Soviet-Marxism: A Critical Analysis*, New York: Columbia University Press. (= 1971, 片岡啓治訳『工業社会とマルクス主義——ソヴェト・マルクス主義批判』林書店.)
- , 1964, *One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*, Boston: The Beacon Press. (= 1974, 生松敬三・三沢謙一訳『一次元の人間——先進産業社会のイデオロギーの研究』河出書房新社.)
- , 1965, “Industrialisierung und Kapitalismus im Werk Max Webers,” *Kultur und Gesellschaft II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1972, 井上純一ほか訳「マックス・ウェーバーの著作における産業化と資本主義」『文化と社会 (下)』せりか書房, 155-92.)
- Meynaud, Jean, 1964, *La Technocratie*, Paris: Editions Payot. (= 1973, 壽里茂訳, 『清水幾太郎責任編集 現代思想 5 テクノクラシー』ダイヤモンド社.)
- 中山茂, 1994, 「技術制度化の思想史」『岩波講座 現代思想 13 テクノロジーの思想』岩波書店, 213-37.

- 直江清隆, 2014, 「思想史における技術」『社会思想史研究』38: 24-42.
- Offe, Claus, 1968, “Technik und Eindimensionalität: Eine Version der Technokratiethese?,” Jürgen Habermas hrsg., *Antworten auf Herbert Marcuse*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 73-88.
- 小野清美, 1996, 『テクノクラートの世界とナチズム——「近代超克」のユートピア』ミネルヴァ書房.
- 良知力, 1971, 『初期マルクス試論——現代マルクス主義の検討とあわせて』未来社.
- Robinson, Paul A., 1969, *The Freudian Left: Wilhelm Reich, Geza Roheim, Herbert Marcuse*, New York: Harper. (= 1983, 平田武靖訳『フロイト左派——ライヒ ローハイム マルクーゼ』せりか書房.)
- Schoolman, Morton, 1984, *The Imaginary Witness: The Critical Theory of Herbert Marcuse*, New York: Macmillan.
- Simich, J.L. and Rick Tilman, 1980, “Critical Theory and Institutional Economics: Frankfurt’s Encounter with Veblen,” *JOURNAL OF ECONOMIC ISSUES*, 15(3): 631-48.
- Stammer, Otto hrsg., 1965, *Max Weber und die Soziologie heute : Verhandlungen des 15. Deutschen Soziologentages*, Tübingen: J.C.B. Mohr. (= 1980, 出口勇蔵監訳『ウェーバーと現代社会学——第15回ドイツ社会学会大会議事録 下』木鐸社.)
- Steigerwald, Robert, 1969, *Herbert Marcuses “dritter Weg”*, Köln: Pahl-Rugenstein Verlag.
- 庄司興吉, 1977, 『現代化と現代社会の理論』東京大学出版会.
- 徳永恂, 1965, 「『四つのウェーバー像』——マックス・ウェーバー生誕記念ドイツ社会学会に出席して」『社会学評論』15(4): 137-47.
- Veblen, Thorstein, 1914, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York: The Macmillan Company. (= 1997, 松尾博訳, 『ヴェブレン 経済的文明論——職人技本能と産業技術の発展』ミネルヴァ書房.)
- , 1921, *The Engineers and the Price System*, New York: B.W. Huebsch. (= 1962, 小原敬士訳『技術者と価格体制』未来社.)
- 山之内靖, 1982, 『現代社会の歴史的位相——疎外論の再構成をめざして』日本評論社.

(まわり れお、東京大学大学院人文社会系研究科、leotufs@gmail.com)  
(査読者 宮本真也、片上平二郎)

# **Herbert Marcuse and the idea of Critical Social Theory of Technology:**

Focusing on an analysis of technocracy in Second World War

*Reo MAWATARI*

Herbert Marcuse has been known as a thinker that criticized the connection between Technology, capitalism and the political system. Previous studies denote that his analysis depends on technological determinism and he ignores the subjectivity of a revolution. Differing from these studies, this paper aims to reconsider the criticism on Technological rationality by Herbert Marcuse. The main document of this survey is “Some Social Implications of Modern Technology” and this paper especially focuses on Marcuse’s interpretation of Thorstein Veblen. Consequently, this paper points out the continuity of Marcuse’s idea of Critical Social Theory of Technology from WW II to 1960’s. Marcuse has intended to overcome the domination of technology. The liberation through technics is accomplished by the connection between “technics and labor” in WW II , “technics and art” in 1960’s.